

永州における韋氏について

——唐末華南辺境統治の一事例——

藤 田 純 子

はじめに

唐代におけるフロンティア対策は、北方では主として武力に重点がおかれ、南方では文官による統治に力点がおかれていたといえよう。唐初の府兵制下における折衝府の設置場所が北辺に偏在していたことなど、その一例になるであろう。またフロンティアとなるのは一回かぎりのものではなく、叛乱がおれば内地化したところも再びフロンティアにもどるともいえるわけで、王朝勢力の進展と退潮によって、その前線には前進・後退があるのである。ただ唐代における南方をみてみると、他の王朝でも同様の面があるうが、フロンティアは面として統治の内実をともなう。漸次進展していったのではなく、むしろ線と点で前進していったようである。したがってすでに内地化されている領域内に「辺境」とおぼしき地帯が点在するのも不思議なことではない。

つぎにあげる永州は、華中の先進地帯からそう遠くもなく、またそこより南には嶺南道が広くひらかれていた。あるが、唐中央から見れば、この地は内地の中の「辺境」たることを免がれない土地であった。

唐末の時代にこの辺境たる永州に赴任した刺史韋宙は、ここでいささか異色の治政を施いたのである。このことから唐代南方における辺境の状態の一端について述べ、あわせて韋氏についても考察を加えてみたい。

第一章 永州について

永州は現在の湖南省南部に位置し、西南に都龐嶺、萌渚嶺をはさんで広西チワン族自治区に接する地域にあった。唐代には華中から広州へいたる陸路はいくつかあるが、江陵府から岳州、潭州（長沙）、衡州、永州、桂州をへて広州にいたるルートがひらかれていた。^①永州はそのルート上にある。おおよそ州の中央を屈曲して湘水が北流しているが、水路を利用するばあいその水源に向って南行すると、湘水と灘水の分水嶺をつなぐ靈渠によって桂州に出、ここから桂江を下って梧州に出でて珠江にのって広州にいたりるのである。しかしこの湖南・広西間の重要な水路である靈渠はあまり利用されなかったようで、敬宗の宝曆年間にいたってはじめて開修された記録がみえる。^②その後すぐにとだえるが、懿宗の時代になって、嶺南方面での対南詔戦がはげしくなるにつれて、軍糧補給を湖南方面より受ける必要から靈渠修築がたびたび行なわれたようである。^③

永州の領する範圍は零陵、祁陽、湘源、灌陽の四県で、治所は零陵県におかれていた。

戸数

口数

天宝時代

二七、四九四

一七六、一六八

（元和時）

八九〇

唐 末

六、三四八

二七、五八三

（『新唐書』地理志による。ただし元和時の戸数は『元和志』によった。ちなみに同書には開元時の戸数は二七、五九〇とあつて天宝時代ほとんど変化はない。）

右の戸口数を見ると天宝時代に比べて唐末ではそれが激減している。『元和志』では戸数八九〇になっていて、これまた極端な減少を示している。この『元和志』の数値をそのまま信ずることはできないが、戸口数の減少はその頃から始まっていたとも推測できる。いずれにしてもこのような戸口数の減少は、開元・天宝年間の戸口数が正確であったか否かは別として、少なくとも天宝以降、元和年間前後にはこの地方における戸籍が正確に調査把握されていなかったところに一因があるのではないかと思われる。それはまた唐中央の統制が伸張したとき（開元から天宝へ）と後退した時期（天宝から元和へ）の違いであったことを示していよう。

A 柳宗元のみた永州

さて永州がどのような土地であったか、文人の目をとおしてその一端をうかがってみることにしよう。

永貞元年（八〇五）、順宗の退位後、失脚した柳宗元は、この永州の地では一〇年におよぶ貶流の生活をおくった。彼はその文集の中でしばしば永州の土地、人びと等について叙述している。「永州は楚に於て、最も南と為す。状は越と相い類^㉔る」所と記しているが、樂史の『太平寰宇記^㉕』にも、永州の風俗は「桂州と同じ」としていて、嶺南と共通した風俗であることをうかがわせる。またそこは火事の頻発するところでもあった。「永州、火災多し。五年の間、四たび天火の迫る所と為れり。徒跣して走り出で、牆を壊り、牖に穴あけ、僅かに燐灼を免る^㉖」と、火災に遭ったさいの恐怖を語っている。これはのちに記すが、韋宙の父の丹が江西觀察使として洪州に赴任したさい（元和二年から五年まで）、その民衆の家屋は草ぶき屋根に竹の椽で出来ていたために、乾期にはまさつておこった自然発火による火で家を焼かれる災難の多いことが記録されている。永州のばあいもおそらく同様であろう。天災には旱害、水害、地震などが主としてあげられるが、南方では火災も加えることができるし、この火災になやむ人びとの生活状態を改善するために、瓦の製法、瓦屋の建設を指導した地方官の記録は、さきにふれた韋丹の伝やその他の人びとの列伝にも時折記されているところである。^㉗

そして永州がなにより北方の中國と異なるところは言葉であつた。

楚越の間、声音特に異なる。鳩舌啁譟、今、之を聴くに怡然として怪しまず、已に与に類とは為れり。家生小童、皆、自然嘵嘵として、昼夜耳に滿つ。北人の言葉を聞けば、則ち啼呼して走り匿れ、病夫と雖も亦た怛然として之に駭く。

永州の人は「北人」の言葉を聞くと逃げだして姿をかくし、たとえ病人であっても、「北人」をみるとひどくおどろくさまを伝えている。これは言語が北方と南方で決定的にちがうことを指摘しているのであるけれども、「北人」の言葉を聞いただけで身をかくしてしまふ永州の民の姿は、素朴であるとか、未知のものへの恐怖心をものがたっているとかというほかに、支配者階層である「北人」そのものへのすくなからぬ恐怖心をもっていたことを暗示しているともいえるであらう。

柳宗元はさらに永州を「蠻夷」の地と表現している。これは多分に文学的誇張、ないしは自らの不遇を表現する修辭であることを忘れてはならないが、この時代における湖南省南部にたいする唐人の意識はおおむねこのようであつたこともまた事実である。しかしながら柳宗元はまったく北方の中国人から隔絶した世界に住んでいたのではない。彼の文集をみると、知人、友人、親族の往来はわりあいひんばんに あつたことを示しているし、正規の任命をうけて赴任してくる官人も当然いたわけで、それらの人びととの交流もあつた。ただ貶謫をうけてここに住む士人も多かったようである。このことはやはり永州がフロンティアであつたことを意味していよう。

永州の治所がおかれていた零陵県には龍興寺、法華寺などの仏教寺院も存在していた。また歴代の刺史が森林や荒蕪地をきりひらき、たちあらわれた奇石、怪石、谿谷などの自然の景觀をのこして疎林とし、溝をひらいて川を導き、新たに池を配して堂や亭を建てて賞玩の場にしたことなどが彼の文に記されている。彼自身もまた永州の山野や谿流を逍遙したのである。なかでも刺史崔能が造営した万石亭は宏壮雄大な規模で見事なものであつたらしい。それが完

成したおり、そこへいたった州邑の耄老たちは「吾儕、是の州に生まれ、是の野に藝う。眉厖く齒齟るに、未だ嘗て此を知らず、豈に天墜ち地出ずるや」と、その勝景に驚嘆したという。この文は州民の好尚は、「北人」の好尚とは対照的な姿をあらわしていることを物語るものであるが、それよりむしろ北方人の自然に対する働きかけに感嘆していることを示すものとして注意しておくべきであろう。

さて韋宙は柳宗元の頃より四〇数年後の大中六年（八五二）以後の数年間を永州刺史としてここに滞在した。彼はその父の丹とともに『新唐書』循吏伝に載せられているが、その記録の中にあらわれてくる永州の民の姿は柳宗元の文からうかがわれるそれとたいしてちがわないのである。その伝の中には永州の民のなかに生きている慣習、年中行事に関する記録がのせられている。それは永州の人びとの民俗といつてよいが、彼らの暮しのありようがどのようなであったかを部分的にでも示して興味ぶかい。

初め傭民、婚すれば、財を出して賓客を会し、破酒と号す。昼夜に集い、多ければ数百人に至る。貧しき者も猶数十なり。力足らざれば則ち迎えず。淫奔に至る者あり。宙、条約し、略ぼ礼の如くせしむ。俗、遂に改まる。

邑中の少年、常に七月を以て鼓を撃ちて民家に羣入す。行盜と号す。皆、迎えて弁具を為す。之を起盆と謂い、後、解素を為して喧呼痕闘す。宙、至り、一切之を禁ず。

「行盜」、「起盆」の行事が示している事柄、すなわち若者たちが「擊鼓羣入」した家が、「弁具を為す」のは、酒食をもって接待することで、それはすなわち「起盆」の意味である。婚礼にさいして数百人から数十人の賓客が会して昼夜にわたって「破酒」する慣習も含めて、これらは永州の民の数少ない娯楽の機会であったのであろう。柳宗元の文にあらわされている、いわゆる「土人」の好尚とは異なったもので、そこに固有の土着の人びとの存在と彼らの世界が展開していたことを知りうるのである。そしてそこにはまだ活力を失っていない州民の姿がおのずからあらわれている。

これは中原の文化にまだ馴化されていないことを意味しており、それが唐の側からみると、永州は辺境であり、「夷蠻」の地とうったたのであろう。しかし州民にとっては彼らの独自の世界であったといえよう。

B 刺史韋宙の治政

永州における韋宙の治政の中でもっとも注目すべきものは二つある。そしてこれらは他の良吏伝にはあらわれていない内容である。

県、旧と吏を置き賦を督す。宙、民をして自ら輸せしむ。家十ごとに相い保し、常に期に先んぜしむ。^⑩

これは永州の郷村を保で組織化し、租税納付を自主的に期限内に行なわせることをはかったものである。租税納付のさいの相互保証（＝連帯責任）を義務づけられたからには、さらに逃亡者の納めるべき税の負担も含まれているであろうし、それは同時に犯罪の摘発や連坐制なども含められていたであろうことは充分に考えうるところである。したがってこの施策を行なった背景には戸籍の再把握があったであろうし、また州民の相互扶助的な活動をひきだすための政策であったに違いあるまい。というのはこの点はつぎに述べる「社」と関連してくるからである。

民貧しくして牛の以て耕に力むる無し。宙、為めに社を置き、二十家ごとに月に錢若干を会め、名を探りて得る者、先ず牛を市う。是を以て準と為す。之を久しゆうして、牛乏しからず。^⑪

これについてはすでに那波利貞先生が「唐代の社邑に就きて」の中でのおられる。「民の買牛資金を作る為に無尽講を組織せしめ、其の講を落して順次に牛を買わしめたることを謂へるものにして、これ明かに組合員即ち講中の経済的相互扶助組合である」とされている。確かに相互扶助組合であるという点はその通りであろう。ただし「無尽講」は本来、仏教教団での金融業のひとつであり、金銭の貸借のさいには担保や利息を必要としていたから、このばあいには「無尽講」の応用というべきかもしれない。さらにつけ加えるならば、州民間の互助組織としての^⑫のはたらしに重点がおかれていたのであるから、経済的な面ばかりでなく、農具の貸借なども行なわれていたのでは

ないかとも想像されるのである。「社」には宗教的意味に重点がおかれたばあいと、宗教色をはなれて純粹に相互扶助組織であるばあいなどのあったことをあげられているが、いづれにしても「社」は民の側からなされる組織であった。しかしここではそれが刺史、即ち官の側から他律的に組織された点で、州民に自治組織の生まれていなかったことをものがたるものであろう。韋宙はこれらのほかにも常平倉を設け、被災対策を積極的に行なうなどの治政をほどこした。永州には「千金の家無し」と『太平寰宇記』に記されているところからみると、きわだった貧富の差の生じていない社会がなお存続していたと認められる。このことは韋宙伝に載る彼の治政の内容から看取できる。そこには唐朝による積極的な水利事業や墾田などの開発事業が行なわれてはいなかったことを示しており、相対的に貧しい地域であったと認めることができる。しかしだからといって「武陵桃源」の世界であったとは決していえないのである。役の徵発や貢納に苦しむ州民の姿などからうかがい知ることができるように、唐朝の徵求は勿論あったのである。韋宙は既存の社会に「保」——隣保制——による郷村の再組織化をはたし、さらに「社」を置いて州民の生活安定策を講じたのである。これらの政策は永州という土地のもつ条件の中から最初に施されたものといえることができる。また彼は「破酒」のいきすぎによってもたらされる弊害を「礼」で律し、「行盜」や「起盆」の民俗を一切禁止する態度で臨んだ。これは永州の民の天地に儒教的倫理観がもちこまれたことを意味しているのはいうまでもないが、彼はそのほかにも州民の生活のごく卑近なレベルでの指導も行なっているのは、^⑤ 辺境と目される地域での唐朝官僚による「教化」の一端を示しているよう。教化の目的の一つは生活安定であらうが、同時に優勢な文化をもつ側がその文化を土着民に押しつけ同化をはかることを目指すもので、それが中国的世界観の浸透を意味しているといえよう。

フロンティアが面として前進していくばあいとは、経済、社会、文化をひっくり返るめて中国的価値観に染めあげられ、その内実を充足させて前進していくことであるといえよう。韋宙というひとりの官僚による治政は、州民の卑近な生活レベルでの指導を含めての州政であったから、それだけ人民にたいする効果もあげえたであらう。辺境統治のよき

典型例とは決していないが、唐朝官僚による辺境における治政が具体的に示されている点で興味深いものがある。さてこの時期（宣宗大中年間）に永州という辺境で行なわれた韋宙の治政はどのような意味をもつのであろうか。唐朝の官僚支配体制が大きく動揺し華中の先進地帯においては各藩鎮軍乱がいままに起きようとする時代であったら、嶺南では南詔との関係が不穏になりつつある時でもあった。唐朝の官僚支配が各地で行きづまりをみせていたからこそ辺境での支配力強化が必要とされたのであり、それは換言すれば州民の唐朝志向化がはかられたのであるといえよう。韋宙の永州における治政は、そのような要請を充たすための役割を果たしたものであろう。

第二章 韋氏父子について

前章でとりあげた韋宙は、その父の丹の伝（『新唐書』循吏伝）に付されて、行状が記録されている人物である。丹は貞元・元和朝の官人で、のちに循吏として評価された人である。宙について述べるにあたつて、その父を無視することはできないので、ここではまず韋丹について触れることにしたい。

A 韋丹の経歴

韋丹については韓愈がその墓誌銘^⑧を撰し、大中年間には杜牧が遺愛碑をつくつていて、当時知名の士であった。『新唐書』循吏伝の記録はすべてこの二つによっている。

韋丹（七五三～八一〇）、字は文明、京兆万年の出身で、北周の太司空韋孝寛の六世の孫にあたるといふ。早く父を失ない、外祖父にあたる顔真卿に従つて学業を受け、明経に及第した。のちふたたび五経にあげられ、校書郎をもつて起家している。咸陽尉をへて、貞元のはじめごろには邠寧節度使張獻甫に辟召された。その後太子舍人に遷り、同一七年（八〇一）ごろ容州刺史・容管経略使となった。容州では、学校を興し、州城を築き、屯田を行ない、州民に耕織の方法と茶・麦の栽培を教えた。ついで河南少尹、諫議大夫に遷った。憲宗の即位後おきた四川の劉闢の乱にさ

いしては、劉闢を討つべき意見を上疏していたから、彼もまた当時の藩鎮抑圧策をすすめようとする官僚の一員であったといえよう。元和元年（八〇六）、劍南東川節度使となり、ついで晋慈隰州觀察使をへて、同二年、洪州刺史・江西觀察使になる。

洪州（南昌）に赴任した彼は、前章で記したように火災を防ぐために瓦の製法と瓦屋の建設を指導した。そして瓦屋一万三千七百、重屋四千七百をつくり、火の憂いを絶つことができた。また瀨水に堤防を築き、陂塘五九八カ所をつくり、灌田一万二千頃におよんだ。その他にも治績をあげたが、かつて死罪を許した管下の卒に誣告されて、觀察使の任を解かれ、その沙汰を待つうちに任地で没した。死後、韋丹の「不法」は不実であることが証明され、かえってその治績が明らかにされたという。

B 韋宙の経歴

韋宙の生卒年は不詳であるが、おそらく貞元末年頃に生まれたと思われる。蔭によって官界にすすみ、「累ねて河南府司録参軍に調せらる。李珣、河陽の幕府に表す」とあるところからみると、李珣に辟召されるまでに、いくつかの官を経ていたのであろう。李珣は文宗、武宗、宣宗の三朝に仕えた高官である。その李珣が河陽節度使となったのは、大中二年（八四八）のことで、宙の辟召もこの頃であったと考えてよい。したがって宙の起家は文宗の開成年間か武宗の会昌初めころのことであらう。

翌年宙は拔擢されて侍御史となった。彼が拔擢をうけたのはまったく父親の功績に負うところが大きかった。

大中三年正月、上、宰相と論ずらく、元和の循吏、孰れを第一と為すやと。周墀曰く、臣嘗て江西に守土せしとき聞くならく、觀察使韋丹の功德八州を被う、没して四十年、老稚歌思すること、丹尚お存いますが如し、と。乙亥、史館修撰杜牧に詔して丹の遺愛碑を撰らしめ、以て之を紀す。仍りて其の子河陽節度判官宙を擢んで御史と為す。

循吏伝や『唐語林』^⑧にも、周墀から丹に子のあることを聞いた宣宗は、「速やかに好官を与えよ」といったと、その拔擢のいきさつを記している。宙はその後、三遷して度支郎中となった。

大中六年（八五二）、河東節度使となった盧鈞は、当時北辺で唐に帰順した回紇その他の遊牧諸部族と唐側の辺境の吏民との間に紛争が多かったので、「信重の吏」をえらんで北辺を視察させようとした。宙は自らそれに応じて副使となり、定襄、雁門、五原より武州塞をこえ、雲中、句注にまで至って、辺境諸部族を安撫し、その紛争を適切に処理したという。その後、中央に召されて吏部郎中となり、ついで永州刺史となった。再び中央にもどり大理少卿となるが、この間の年次は不明である。河東節度副使に任じられたのが大中六年であり、江西觀察使となって赴任するのが同一二年（八五八）であるから、七年から一二年までの六年間に三遷したのである。ついで懿宗の咸通三年（八六二）には嶺南東道節度使に遷り、同八年（八六七）には左僕射同中書門下平章事を加えられた。循吏伝には「咸通中卒す」とあるから、その没年は八年以降であらう。

以上が韋宙の経歴のあらましである。循吏伝は彼の行状の中で永州刺史として在任したあいだの治績をわりあい詳細に記している。これが彼の官歴の中で最も評価されたもののように思われる。その他にあげるとすれば江西觀察使時代に行なった事蹟をつけ加えられよう。

大中一二年五月、湖南軍に乱がおこった。六月には江西軍が乱をおこし、都將の毛鶴は觀察使鄭憲を逐い、七月には宣州の都將康全泰が乱をおこし觀察使鄭薰を逐った。このように続発する軍隊の反乱によって江淮地方が騒然たる様相を呈してきたとき、同年一〇月になって韋宙は江西觀察使に起用された。その理由は、宙の父丹が江西において恵政を施していたためであると『通鑑』^⑨は記している。

韋丹の江西觀察使在任は元和時代であり、当時からみて四〇数年も前のことであつたが、唐朝はそれにのぞみを託したわけである。あるいは彼の治政がいまなお洪州で語られていたのかもしれない。

それはともかく、宙は襄州の精銳部隊の力をかりて速戦法で毛鶴らを鎮定したのであった。

江西の叛將毛鶴、乱を構う。諸道に比ぶるに最も甚し。収復、功を成し難きこと倍せり。

時に当り、韋宙僕射、遙に乗り、先ず襄州に至る。詔を奉じて兵助を差し發遣せしむ。差す所五百人、数内に於いては全て捕盜將を取り、併せて捕盜都將韓季友を差して兵士を惣領し、小路より進發せしむ。仍りて先ず通引を揀扱す。官衛眞候の史慶中、韋宙僕射と元從の押衛為り。榜帖を齎らし、先ず江西に至り、百姓を安存し、遂に劫乱の兵の器甲を収む。韋僕射、舟船もて江西に至るに及ぶや、其れ韓季友の請うならく、捕盜將官健三百人、道を開きて六路に分ち、先ず去きて平明に齊しく到らば、人皆知らざらんと。機計既に行なわれ、遂に半日内に賊將を面縛す、首を授る者、一十三人、当日刑を行ない、首を闕に赴かしむ。韋宙遂に奏請すらく、且らく捕盜將二百人を留めて、江西に在らしめんと。併せて權に韓季友を差して都眞候と為さんことを奏請す。二年の中、重修して解を置き、城市を署するは、皆捕盜將の功力なり。

捕盜將とは襄州地方に寇盜が多いのにそなえて山南東道節度使徐商が平生山棚民や捕えた賊の中から才あるものをえらび訓練養成していた特別部隊で、すでに毛鶴の乱にさきだつて起された湖南軍乱の鎮定に威力を發揮して、その精銳ぶりを証していたのであった。韋宙は徐商からこの部隊をかりて敏速に毛鶴を平定し、その後も彼ら部隊の力をかりて江西地方をおさえなければならなかった。彼のこのときの治政を「簡易、南方、以て世官と為す」と循吏伝には記されている。南方とは江西地方の人びとをさすが、彼らは韋宙の治政を「簡易」と評し、それは「世官」ゆえであると認めたことを意味している。これからみると、代々官僚を出す家であるというレッテルはまだこの地方に通用するものであったことを示している。また毛鶴らによって逐われた觀察使の鄭憲はどんな人物であったか知るすべはない。したがって鄭憲が江西地方でどのような官僚支配を行なったのかはつきりしないわけであるが、韋宙はここで「簡易」な政治を試みたのは、前任者の失敗にてらしたものであろう。

宣州の康全泰の乱を論じられた松井秀一氏は、長年月の間、藩鎮下に軍將となって影庇し、唐朝の収奪を免がれようとしていた富商・土豪層と、一般民衆に対する過重な負担や軍隊を縮少しその衣糧削減による羨余によって榮達をはかるうとする節帥との結合や妥協が成立していたところへ鄭黨の妥協を許さないきびしい官僚支配が行なわれ、それに対して軍人の不満が爆発して軍隊の反乱がひきおこされたものであるとされている^⑤。このことから考えると江西地方における鄭憲の官僚支配もまた同様であつたのであろうと推測することができよう。すると韋宙の政治が「簡易」と評されたのは、富商・土豪層との妥協がはかられた可能性のあつたことを暗示するものであるとともにまた彼らのやり方にあまり干渉しない態度とも解しうる。韋宙は他藩鎮の武力をかりて唐朝の存在を示しつつ、一方で「簡易」な政治を行なつて富商・土豪層との調和をとり、一時的にもせよ江西地方を治めえたのであつた。

さて嶺南東道節度使となつて広州に赴いた韋宙は、ここで交趾に侵入した南詔と唐との戦争の後方守備を担当した。韋丹の出身をみればわかるように韋氏は名族といつてよい家柄である。韋宙は広州で節度使管下の軍の小校である劉謙という人物の才能を認めて彼を女婿に選んだ。小校といえど小頭程度の低い身分の軍人であらう。ただ劉謙の父親は上蔡の人で、広州との間を往来する商人であり、彼の時代に広州に居を移したといわれ、貿易商人であつたようである^⑥。したがつて劉謙は嶺南節度使に影庇し、節度使はその財政的援助をうけていたであらうことは当然考えられることである。その縁組は当然反対されたが、韋宙は「吾が子孫、或は當さに之に依るべし」といって、その反対をしりぞけたという。劉謙はのち、黄巢が広州へ入つたさい、湖南省南部にのがれ、梧州、桂州以西を防備して軍功をあげ、唐朝から封州刺史をさづけられた。その子の隠は唐滅亡後、嶺南の地に南漢王朝を建てた人物であるが、これによつてみると、韋宙の計は間違つていなかったといえよう。

C 韋氏の別業

ところで韋宙にはつぎに示すような逸話がある。

相国韋宙、善く生を治む。江陵府の東に別業有り。良田美産、最も膏腴と号せらる。而して稻を積むこと坻の如く、皆滯穗を為せり。咸通の初、嶺南節度使を授けらる。懿宗、番禺は珠翠の地なるを以て、貪泉の戒を垂る。宙、従容として奏して曰く、江陵の莊の積穀、尚お七千堆有り。固より貪る所無し、と。帝曰く、此れいわゆる足穀翁ならんや、と。

これは『太平広記』に載るエピソードであり、『北夢瑣言』より採っている。この話はまた『唐語林』巻七にもおさめられている。『太平広記』と前二書は少々字句の相異があり、『太平広記』の方が筋として通りがよいように改められているけれども内容に変わりはない。

この逸話からわかるのは、韋宙は江陵府の東に別業を所有していることである。その規模については具体的にはわからないが、「良田美産」であり、「最膏腴」であり、おそらくは刈りあげた稲であらうけれども、それが積み上げられると「坻の如」き様子を呈する。それを脱穀しないでそのままに保存している。積穀が「七千堆」に至ることなどから考えると非常に広さの田地を有し、そこからの收穫量が大量にのぼるものであったことを推測させるのに充分である。また「良田美産」なるところから推しても、それは主穀類の生産だけでなく、經濟作物の耕作や植材などと同時に畜産、養魚などからの利益もあがる富有的な莊園であるとの想像はゆるされないであらうか。

ところでこの逸話が事実であるかどうかがつぎの問題となるであらう。循吏伝の韋丹や宙の条には別業入手の手がかりになる記事はないのである。ただ『唐国史補』の撰者である李肇に、「東林寺経蔵碑」の文があつて、手がかりになるのはその中につきのように記されている事柄である。

……元和四年、雲門僧靈澈、流竄して歸り、此の山に棲泊す。将さに去らんとして、廉問の武陽韋公に言う。公、応じて曰うこと響くが如し。往年、公の夫人蘭陵の蕭氏、終りて釵梳珮服の資有り。而して荊州において良田數頃を買い、其の租入を収めて以て檀施に奉ず。是に至りて之を取り、増すに清白の俸を以てし、而して經營す。

……（元和）五年、韋公薨す。……

東林寺（江西省廬山）の經藏には三歳の經論が欠け、それはまだ補われてはいなかった。この現状を僧靈澈は時の觀察使「武陽韋公」に語った。韋公はその要請をうけて、夫人の遺した服飾費によって荊州に土地を買い、その租入と俸禄をもって、經典類を補充し、經藏の經營維持にたいする財政的援助を行なった。

ここに記されている「韋公」とは韋丹のことである。韋丹の経歴からわかるように、彼は元和二年から五年八月のその死まで江西觀察使として洪州に在任していた。また彼が武陽郡公に封ぜられたのは元和二年のことであるから、「武陽韋公」と称されても不思議はあるまい。また韋公の死が元和五年であるのと韋丹のそれとが合致している点などから、韋公すなわち韋丹であると決めてさしつかえない。したがって、この碑文の「荊州に於いて良田數頃を買う」という記述は、『北夢瑣言』等に見える韋宙の逸話をうらづけており、これが虚構の話ではないことを証しているよう。

韋宙の江陵府の東にある別業は、その父親が入手したものであった。しかしさきの「經藏碑」によれば、「良田數頃」とある。數頃と韋宙の別業にかんする描写とは、豊かさという基準をもつてみると必ずしも一致しないのである。數頃の土地を有するばあいにはそれがどの程度の内容をもったものであったのかを考える基準として、つぎに示す柳宗元の従弟柳諶がよい例となるであろう。

（前略）江陵に歸家する。宅一区有り。之に環らすに桑を以てす。僅指三百有り。田五百畝有り。之に穀を樹へ、之に麻を芸へ、養ふに牲あり。出するに車あり。人に求る無く、日び諸弟を率ひて滑甘豊柔を具ふ。

柳諶についてはその詳しいことはわからないけれども、宗元の文の中からひろいだしてみると、宗元より二歳若く、進士に及第してのち、広州、邕州の従事をへて御史にいたった。以後「智を以て免ぜらる」とあるけれども、それがないゆえなのか具体的にはわからない。それより官途をすて、江陵の家に帰ったと記されている人である。それは元

和四、五年頃と推測される。

ここでは田五〇〇畝（＝五頃）であるから、韋丹の購入した数頃とたいして差のない面積であろう。柳謀は五頃の田に稻を植え、麻を作り、家畜を養い、その他に野菜類も植えていたのであろう。「僅指三百」というのは、三〇人のことで、「僅」は奴婢を意味しているとしても、三〇人という数字は多いような気もする。家族ぐるみの数と見れば五〜六戸ということになり、大部分が水田と考えれば妥当であろう。いずれにしても充分な食糧があり、そのうえ桑や麻も植えていたから布にして衣服に加工するところまで行なわれていたとも考えられる。柳謀に関するこの文は衣食住のうえで自給自足して余裕のある生活営んでいたことをものがたるものであろう。このようにみると、田五頃の持主は、大地主とはいえないが、五頃もあれば中小地主として悠々自適する程度のことではきたであろう。

この例にそくして考えると、韋丹のばあいには田数頃とはいっても——五頃とはかぎらないが——それを前後する面積で、ほぼ似たような利益のあがる土地を入手し、小作人を使い、その租を収めていたことははっきりしている。それにくらべて韋宙の時代の別業は、田数頃の利益から想像される小規模の土地所有とはとても考えられないものである。父の時代から数えて五〇年近い歳月の経過があるから、その間に所有地を広げていった可能性は充分に考えられるのである。

韋丹のばあい土地購入の目的は、東林寺経蔵の整備と維持にその檀越としての財政的援助を行なうところにおかれていたと考えられるが、韋宙はさらにそれを「良田美産」・「最膏腴」とよばれるようにしあげたといえよう。江陵の別業は豊かになり、結果的には子孫の計をなしたことになった。おそらくこのような土地所有ということは決して特殊な例ではない。

唐の後半期以降、江南において大土地所有が發展していたのは周知のことであるが、憲宗期頃から地方の中・下層官僚層は自己の任地の近くに土地を買い、土着して地主化する傾向が顕著となっていたこと、彼らは漸次狹隘化して

いく官途では栄達のもぞみが容易にとげられないことを感じて開拓の波にのって土地所有をすすめ地方に土着し地主化することなどは、すでに指摘されているところである。さきに引いた柳謀などもその例であろうが、ただ彼のばあいはその土地の占有の規模は小さく、せいぜい自適しうる程度のものであったことは注意しておくべきであろう。

韋丹のばあいにも、大土地所有の傾向の中でみると、彼の購入した土地の面積はさほど大きいものとはいえないのである。悠々自適に必要な限度で止めるというのもまた当時の官僚士着の一つの姿であろう。

おわりに

以上、韋丹と宙父子二代にわたる官僚生活の素描を試みたのであるが、最後に二人の人となりについて少し触れてみたい。

韋丹は学業を顔真卿よりうけ、明経に及第し、そのあとさらに五経に挙げられている。このことは彼が経学に深い造詣を持っていたことを感じさせる。また江西觀察使時代には詩僧靈澈とのあいだに交友関係があった。東林寺経藏にたいする檀施はこの交友からはじまったものである。靈澈（七四六―八一六）は韋丹より、七才年長であるが、嚴維、劉長卿に詩法を学んだ詩僧として名高く、包佶、権徳輿ら当代一流の文人と詩を通じて交遊のあった人である。この靈澈が詩僧の先達と尊敬し学んだ僧皎然はまだ顔真卿とも交遊関係のある僧であった。このような因縁の糸に結ばれた二人は短かい時間とはいいいながら忘形の契を結び、月に四、五篇におよぶ詩をもって唱和したという。また韋丹の夫人は蘭陵の蕭氏出身であった。蕭氏は仏教信者であり、夫の韋丹もまた仏教に心を寄せる人であったのであろう。彼は官僚としての力柄も個人としても一流の人物であったと想像される。彼は最後の任地である洪州に没するが、その詩にあらわれている心情には、すでに退休の志がみえ、官僚としての中央志向はまったくみられないのである。

韋丹についても同じようなことがいえるかもしれない。時代的狀況はその父の頃とは大きく変わって、唐朝の支配

体制は弱体の一途をたどり、時代の変革を求める動きが大きくなり、なつてあらわれてきていたという点での影響を無視するわけにはいかないが、嶺南に在任した彼は中央での官途の榮達を求めていたようには思われないのである。むしろ彼は新興の階層と手を結ぶこと——劉謙を女婿に選んだことは、個人の才能とそのバックをなす経済力を重視したことを意味する——で名族としての意識を断ち切り、次代への転身をはかっていたかのようである。この点では彼はその父よりもさらに明瞭に時代の変化を敏感に感取しそれに対応したひとといえる。

以上述べてきたことから次のようなことがいえるであろう。

第一に、かれら父子はその生涯を唐朝官僚として終るわけであるが、二人に共通する点は、名族出身として中央で活躍したのではなく、主として地方官として、とりわけ辺境で治績をあげたところにあり、加えて官僚として有能な力柄をもつ人びとであった。彼らのような官僚が辺境で果した役割は、中国文化を辺境に浸透させ、辺境を内実から変えていく、ひとつのきっかけになったであろう。そのような役割を担った人びとは彼らだけに限らないのは当然であるが、多くの人びとによるこのような事績の積み重ねが辺境を中国化していくことにつながる。そのような点で韋宙による永州の治政はその道程を具体的に示す一事例として注意してよいと思うのである。

第二に、地方へ土着する士人の例でもわかるように、彼らは官僚としての前途に見きりをつけて地方に所有地を求めて土着したが、彼らの周辺への影響力はより密接に確実に大きな効果をあらわしたのである。それはなにも辺境だけとは限らず、地方へ文化を移植し、また逆に土着の人びとに中央志向の意識をつよめる核になる働きをしたものと解することができる。

第三に、地方へ土着する士人たちは時代の危機的状況の中で实际的利益や現実的な生き方を求めたのである。この立場は、貴族的立場よりも土地あるいは商業に密着して経済的な実力を重視することを意味している。このことは士人層の中にも五代・宋への変革の芽が生まれていたともいえるのである。従来から五代の軍閥は商業的要素をもつ

た財閥でもあったといわれているが、そのようにスケールの大きなものでなくとも、中小の土豪もまたそのような性格を帯びてきていたことを示すのではなからうか。韋宙は土豪とはいえないが、実力あるものを認めたという点で唐末から五代への時代の変革期に敏感に対応し、現実的な生き方を選んだひとといえよう。このことは唐朝貴族官僚そのものの意識にも変化が生まれ、それが官僚制を内部からつぎくずしていく一方の力になったと考えられる。韋宙の生き方はまさしくそのことを示しているよう。

註

- ① 青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』（吉川弘文館 一九六九年）八頁。
- ② 『新唐書』卷四三上、地理志桂州理定県条および青山前掲書参照。
- ③ 青山前掲書、二八〇頁。
- ④ 『柳河東集』（上海人民出版社 一九七四年）卷三〇「与李翰林建書」。
- ⑤ 『太平寰宇記』卷一六、江南西道 永州条。
- ⑥ 『柳河東集』卷三〇「与楊京兆憑書」
- ⑦ 永州多火災。五年之間。四為天火所迫。徒跣走出。壞牆穴牖。僅免燔灼。
- ⑧ 『新唐書』卷一九七 循吏伝（以下循吏伝と称す）。
- ⑨ 『新唐書』卷二六一 王仲舒伝には、蘇州刺史として任地で「屋を瓦に変え、火災を絶つ」と記されている。
- ⑩ 『柳河東集』卷三〇「与蕭翰林倪書」
- 楚越間声音特異。鵠舌皞皞。今聽之怡然不怪。已与為類矣。家生小童皆自然曉曉。晝夜滿耳。聞北人言。則啼呼走匿。雖病夫亦怛然駭之。
- ⑪ 『柳河東集』卷二七「与永州崔中丞万石亭記」
- ⑫ 吾儕生是州。芸是野。眉厖齒齷。未嘗知此。豈天墜地出。
- ⑬ 循吏伝。
- ⑭ 初僱民婚。出財會賓客。号破酒。晝夜集。多至数百人。貧者猶數十。力不足則不迎。至淫奔者。宙条約、使略如礼。俗遂改。邑中少年。常以七月擊鼓。羣入民家。号行盜。皆迎為弁具。謂之起盆。後為解素。喧呼寂闕。宙至。一切禁之。
- ⑮ 循吏伝。
- ⑯ 鼎旧置吏督賦。宙俾民自輸。家十相保。常先期。
- ⑰ 循吏伝。
- ⑱ 民貧無牛以力耕。宙為置社。二十家月會錢若干。探名得者先市牛。以是為準。久之。牛不乏。
- ⑲ 那波利貞『唐代社会文化史研究』（創文社 一九七四年）

所収、五五九一六〇頁、参照。

- ⑮ 道端良秀『唐代仏教史の研究』（法蔵館 一九五七年）。
⑯ 那波前掲書。

- ⑰ 循吏伝。「俗不知法。多触罪。宙為書制律并種植為生之宜。戸給之」。

- ⑱ 『韓昌黎集』卷二五 碑誌「唐故江西觀察使韋公墓誌銘」。

- ⑲ 『樊川文集』第七「唐故江西觀察使武陽公韋公遺愛碑」。
⑳ 『資治通鑑』卷二四八

大中三年春正月。上与宰相論元和循吏。孰為第一。周墀曰。臣嘗守土江西。聞觀察使韋丹功德被於八州。沒四十年。老稚歌思。如丹尚存。乙亥。詔史館脩撰杜牧撰丹遺愛碑以紀之。仍擢其子河陽觀察判官宙為御史。

- ㉑ 『唐語林』卷七。

- ㉒ 『資治通鑑』卷二四八、大中十二年一〇月条。
㉓ 『全唐文』卷七二四、李隱撰「徐襄州碑」。

江西叛將毛鶴構乱。比諸道最甚。収復倍難成功。當時韋宙僕射兼通、先至襄州。奉詔令差兵助發遣。所差五百人。於數内全取捕盜將。并差捕盜都將韓季友惣領兵士。小路進發。仍先揀挾通引。官衙虞候史慶中与韋宙僕射為元從押衙。齎傍帖。先至江西。安存百姓。遂収劫乱兵器甲。及韋僕射舟船至江西。其韓季友請。捕盜將官健三百人。開道分六路。先去平明齊到。人皆不知機計既行。遂半日內面縛賊將。授首者一十三人。当日

行刑。伝首赴闕。韋宙遂奏請。且留捕盜將二百人在江西。并奏請權差韓季友為都虞候。二年之中。重修置釐。署城市。皆捕盜將功力。

- ㉔ 松井秀一「唐代後半期の江淮について——江賊及び康全泰・裘甫の叛乱を中心にして」（『史学雑誌』第六六編第二号、一九五七年）。

- ㉕ 劉謙については韋宙伝に付されているほかに『新五代史』卷六五 南漢世家にも記されている。

- ㉖ 循吏伝。『北夢瑣言』卷六には、韋宙の夫人などから反對されたと記されている。「我が族類に非ざる」ことがその理由である。「衣冠の家柄」ではないゆえにと解してよいであろう。「族類」に非ざることを中国人ではないと解釈し、劉氏はアラブ人であろうと論じられたのは、藤田豊八博士である（『南漢劉氏の祖先について』（『東西交渉史』所収、一九四三年）が、アラブ人か否かは決めかねる。

- ㉗ 『太平広記』卷四九九。

相国韋宙善治生。江陵府東有別業。良田美産。最号膏腴。而積稻如坻。皆為滯穗。咸通初、授嶺南節度使。懿宗以番禺珠翠之地。垂貪泉之戒。宙從容奏曰。江陵莊積穀尚有七千堆。固無所貪矣。帝曰。此所謂足穀翁也。

傍点を付した個所は「北夢瑣言」の原文を改めたところである。咸通→大中、嶺南→広州、懿宗→宣宗、七千堆→七十堆

- ②⑧ 『七千堆』の「千」は「十」が妥当な数かもしれない。
 ②⑨ 『文苑英華』卷八六五 碑。「東林寺經藏碑」

元和四年。雲門僧靈澈。流竄而歸。棲泊此山。將去言于廉問武陽章公。公応曰如響。往年公夫人蘭陵蕭氏。終有釵梳珮服之資。而於荊州買良田數頃。収其租入以奉檀施。至是取之。増以清白之俸。而經營焉。……

(元和) 五年章公薨。……

- ③① 『柳河東集』卷二四 「送從弟諒歸江陵序」

歸家江陵。有宅一区。環之以桑。有僅指三百。有田五百畝。樹之穀。芸之麻。養有牲。出有車。無求於人。日率諸弟具滑甘豐柔。

- ③② 松井前掲論文参照。

- 河内昭円 「澈上人文集序」 管見——詩僧靈澈の生涯」

〔大谷大学研究年報〕第二六号 一九七四年。

靈澈についてその詩を中心に彼の生涯が詳細に叙述されている。その中には章丹と靈澈との交友関係も記され、章丹が靈澈に贈った詩も一部紹介されている。なお章丹の詩は『全唐詩』第三函第二冊に二篇収録されている。

- ③③ 一例をあげるなら柳宗元はのちに永州からさらに南の柳州に刺史として赴任したが、当地方で進士を志す人びとは千里を遠しとせず彼に師事して文を学び、彼を師法と仰いだ。その門を経た者は必ず名士となったといわれる(『旧唐書』卷一六〇、『新唐書』卷一六八)。

- ③④ 宮崎市定「五代史上の軍閥資本家——特に晋陽李氏の場合」(『アジア史研究』第三所収、一九六三年)。